

「生きやすさ」を追い求めるおっかけ達*

徳 本 慶

1 はじめに

「追う」という行為は、「ある他者と接点を持ちたい」という意思と同時に現れるものである。例えば、目で追うことや、背中を追い、話しかけることなど、他者と接するきっかけとなる場合が多い。人々は日常生活の中で、友人や恋人など、様々な人を無意識に追いかけているだろう。

本稿では、人間関係形成の発端となる「追う」という行為を、日常生活の中ではなく、テレビや雑誌の中にいる人に向けて行う人々の心理に迫りたい。近年、AKB48グループを始めとするアイドルブームが巻き起こり、ファンの活動も注目されるようになった。AKB48やジャニーズ、K-POPアイドル、スポーツ選手など、なぜ人々は手が届きそうで届かない人を追うのか。何を求めて追いかけるのか。「おっかけ」と呼ばれる熱狂的なファン達が形成する人間関係から、この疑問を明らかにする。

2 「おっかけ」とは何か

2-1 「おっかけ」の定義

「ファン」とは、「スポーツ・演劇・映画・音楽などで、ある特定の人物（グループ、チームを含む）に対して魅力を感じている人」（向居・竹谷・川原・川口, 2016, p. 237）である。そして「おっかけ」とは、日本の伝統的な芸能ファンの応援行動であり、「オッカケ、追っ掛け、追っかけ、追駆」とも表記される（吉光, 2013, 2015）。水野（1998）によると、「追っかけ」という言葉は、明治の中頃のポピュラー芸能である「娘義太夫」を追いかけて、「追っかけ連」と呼ばれた青年達に由来する。「追っかけ連」の青年達は、寄席から寄席へ

* 放送大学大橋理枝准教授、社会科学総合学院花光里香教授の指導の下に作成された。

と追いかけて、時には娘義太夫が乗った人力車をかついで運んでいたり、自宅についていたり、おっかけが高じて娘義太夫と結婚する者までいたという。

ジャーニーズ同窓会（1996）によると、現代におけるおっかけの基本は、常識を逸脱しない範囲で日夜を問わず「待つ」ことであるという。テレビ局やラジオ局、レッスン中のスタジオの外、自宅マンションの入り口や駐車場、最寄りの駅など、アイドルの行く所なら雨の日も風の日も猛暑の日も待つことがおっかけの使命だという。吉光（2015）は、具体的なおっかけ行動として、自分の居住地から遠く離れた場所で行われる芸能活動の鑑賞や芸能活動以外の場所での接触を試みる行動を挙げる。即ち、ライブコンサートなどに観客として参加すること以外に、移動中やプライベート空間での接触待ちなども含まれているのである。そのために、ライブコンサートのツアーが行われる全ての会場に足を運ぶことや、おっかけの相手であるおっかけ対象に関する24時間体制の情報収集なども行われるという。

おっかけはその行動だけを見ると、一見ストーカーのように思われる。実際におっかけが暴徒化し、おっかけ対象に対してプライバシーや著作権を侵害したり、怪我を負わせたり、尾行や盗聴などのストーカー行為に走るケースも生じている。しかし、おっかけとストーカーの間には大きな違いが存在する。それは、おっかけ対象を追いかける際に用いる情報は、おっかけ対象がオフィシャルに発信するもの、すなわち誰もが得られる情報であるという点だ。ストーカーのように、親密な関係から得られる連絡先や住所などのプライベートな情報、あるいは個人的な感情から行動するのではない。マスコミやインターネットなどから得られるオフィシャルな情報からわかる範囲内で、おっかけは行われるのである。

また、おっかけはその多くが集団で動いている。吉光（1997）は小さいもので3～4人、大きいもので30人前後の集団で、ライブ会場にて出会い、行動を共にする小集団を「オッカケ・グループ」と呼んだ。この集団はライブコンサートやイベントが始まる直前直後に会場付近に集まり、情報交換やそのイベントに関する感想を述べ合うことなどから始まり、さらにその前後も一緒に買い物をしたり、食事をしたり、一緒にホテルに泊まったりしながら、おっかけ対象のライブコンサート・ツアーやイベントを一緒に回り、おっかけをするという特徴があるという。

本稿では「おっかけ」を、「アイドルやスポーツ選手などのおっかけ対象を見るために、自分の時間や労力は惜しまず、おっかけ対象が現れる場所にどこまでもついていく行為、並びに行為者を指す。そしてこの行為者は公にされている情報を用いて、集団で行動する特徴をもつ。」と定義する。

2-2 おっかけの動機

なぜ自分の時間や体力、金銭を費やして、おっかけを行うのだろうか。その動機は大きく分けて、3つあると考えられる。

まず1つは「疑似恋愛」と呼ばれるものである。先行研究においても指摘されているが、これはファンが応援するファン対象に対して恋愛感情を抱くというものである。ジャニーズ同窓会（1996）は「おっかけの心得」として、「大好きなアイドルの側にいたくてたまらないファンは、タレントの行くところ、帰るところ、ずーっと離れたくないからおっかける、それがおっかけ」としている（p. 196）。これは小城（2004）が指摘したファン対象への「強い依存、恋愛、嫉妬、奉仕を示す『疑似恋愛感情』」（pp. 194, 196）と同じものである。自分が魅力を感じるおっかけ対象へ恋愛感情を抱くことによって、テレビや雑誌などで目にするオフィシャルな姿ではないプライベートへの関心が高まる。そして、「おっかけ対象を所有したい」という願望を持つようになり、自分だけしか知らないおっかけ対象の姿を求め、おっかけを行うのである。これは一般的によく言われる「グルーピー」と呼ばれる女性の心性に近い。吉光（2015）によると、「グルーピー」とは、性交渉や恋愛関係を持ちたいといった彼女志向をもっておっかけ対象に接触を試みる女性である。つまり恋愛感情によって、自分だけしか知らないおっかけ対象の姿を「もっと見たい」「もっと知りたい」という所有の願望から、どこまでもついていき、おっかけを行うのである。

2つ目は「宗教性」である。濱野（2012）は、AKB48の台頭によりアイドルに宗教性が生まれたことを指摘し、AKB48がもつ宗教のようなものとしきいいようがないコミュニケーション・システムの特徴として、「近接性」と「偶然性」を挙げる。「近接性」とは、「会いに行けるアイドル」をコンセプトとし、劇場や握手会などで、極めて近い距離でメンバーとコミュニケーションをとることができるというものである。資本主義が広まった現代社会では、お金というものが絡んだ瞬間に人と人との温かいコミュニケーションは失われ、お金だけで判断されるドライな関係性、即ち「疎外」を生む。そういった現代社会の中で、AKB48は、「近接」して会うことのできる権利や、メンバーとファンの間で「関係性」を築くことのできる権利を販売する。濱野（2012）は、「関係性」そのものを商品として売るアイドルがAKB48であるという。AKB48は、資本主義の「疎外」を「近接」に置き換えていく宗教的装置であるというのだ。一方、「偶然性」とは、宗教的経験をもたらし、自分が応援するメンバーとの「関係性」を決定づける最大のファクターであるという。具体的には、公演を行う劇場内に入場する順番を決める抽選や、コンサートチケットを購入するための抽選、公演中に応援するメンバーと視線が合うことなどが挙げられる。現代社会をどう生きるべきかについて、AKB48のファンはAKB48が生み出すあらゆる「偶然性」に身をゆだねながら、自分が応援するメンバーに導かれて、「誰かのために」生きることであるという示唆を得るのだと濱野（2012）はいう。

つまり、「大きな物語」を失い超越者を失っている現代社会において、AKB48はファンに対して、「近接性」と「偶然性」のもとで生きる意味を与えてくれる宗教性をもつ（濱野, 2012）。そして、ファンはこの2つの「救済」を求め、おっかけを行うと考えられる。

3つ目は「オッカケ・グループの仲間から承認を得るためにおっかけを行う」というものである。吉光（2015）は、おっかけ対象に接触を試みたい心性を複数挙げており、その中に仲間内で一目おかれたい、即ち承認を得たいというファン同士の関係性への志向があるとしているが、詳細は述べていない。そのため、本稿ではこの点について明らかにしたい。

オッカケ・グループは、あるおっかけ対象への好意のみで結ばれた人々で成り立っている。互いに共有しているものが感情しかないおっかけ達は、オッカケ・グループ内での人間関係を不安定だと感じているのではないだろうか。このような脆い人間関係を円滑に行うために、おっかけ達は仲間からの承認を欲しており、そのためにおっかけ対象からの「認知（顔と名前を覚えてもらうこと）」を求め、おっかけをしているのではないだろうか。

この「オッカケ・グループの仲間から承認を得るためにおっかけを行う」という動機背景には、日常生活で所属する学校や会社などにおける人間関係をうまく築くことができないおっかけ達の姿があると考えられる。即ち、日常生活の人間関係では自分の承認欲求を満たすことができず、ライブコンサートやイベントなどの非日常で生まれる人間関係に依存しているのではないだろうか。そこで次節では、日常・非日常の生活において、おっかけ達がどのような人間関係を形成しているのかを考察する。

3 おっかけを取り巻く人間関係

3-1 「オッカケ・グループ」の形成

ファン同士が繋がり形成されるコミュニティの多くは、ファン対象が出演するライブコンサートやイベントで生まれる。吉光（1996）は、あるバンドのライブ会場付近において、2～5人のファンからなる群れを「タマリ」と呼び観察した。この群れはライブ会場付近で行動を共にするだけでなく、ライブ会場に入ってからでもライブが終了してからも行動を共にする。また、翌年の調査で吉光（1997）は、「タマリ」と同様にライブ会場で出会い行動を共にする小集団を「オッカケ・グループ」と呼んだ。本稿では、吉光（1996, 1997）の調査対象となった同じ特徴をもつこの2つの集団を「オッカケ・グループ」と総称する。

まず、吉光（1996）はライブという場所を拠点に行動を共にする人間の群れ、即ち「オッカケ・グループ」の構成員達は、どのように出会い、どのようにしてオッカケ・グループを構成する状況に至っているのかについて調べた。その結果、オッカケ・グループの構

成員達は、全体の78%がライブ会場での対面的状況において最初に知り合ったということが判った。また、ホテルやバンド関係者の地元の飲み屋、打ち上げ先の飲み屋など、ライブ前後やライブのない時にバンドのメンバーが出没する場所、即ち彼などが現れるのを待つ「おっかけ」を行う場所で、おっかけてきた人間同士の出会いが生まれた場合もあった。結果的には、オッカケ・グループの構成員達は全体の91%がおっかけ対象に関連のある場所での対面的状況において最初に知り合い、出会ったということが判った。

現在はこれに加え、FacebookやTwitterなどのSNSの普及により、インターネット上でおっかけ対象に対する興味・関心を通じて出会うことが増えている。このようなインターネット上の出会いが実際の対面的状況の出会いにも繋がっていると考えられる。吉光(1996)の研究当時と近年の状況では通信や情報環境に違いがあるが、当時の時点でも手紙や電話などの情報伝達手段を用いた間接的接触により出会いが生まれていたことが明らかになっている。

つまり、ライブコンサートの会場を舞台と一緒に楽しく盛り上がっている人々の多くは、家が近所同士だということや、学校や会社が同じだというような日常生活における所属集団を同じくして仲良くなった者同士ではない。非日常の空間で生まれた人間関係なのである。

3-2 オッカケ・グループにおける人間関係

このようにして出会い、形成されたコミュニティでは、どのような人間関係が築かれているのだろうか。

吉光(1997)によると、「オッカケ・グループ」はライブコンサートなどの非日常的なイベントで集団形成がなされる集合行動的集団であるという。つまり、「オッカケ・グループ」の関係は、共通の準拠他者に志向する者同士の同調行動によって形成されているというのである。

この事象を指摘した吉光(1997)は、諸個人自身が所属しない他の集団に参加していく原因としてマートン(1961)が言及した「一集団内における『孤立者』はとくにいつでも非所属集団の諸価値を規範的準拠棒として採用する態勢にある、と推測されている」(p.278)という指摘をうけて、「近隣・学校・会社といった日常生活上で係わる集団の中で孤立する傾向をもつ人間は、非日常的イベントの参加者同士から形成される集団での同調行動を行いやすいのではないだろうか」(p.34)と考えた。吉光(1997)はこの考えのもと、首都圏と関西地方のライブハウスでオッカケ・グループを形成している10代から30代の未婚女性を対象にオッカケ・グループへの係わりの特定化を行い、各調査対象者が非日常的生活領域で形成する集団への同調行動を特定化した。次に、各調査対象者自身の近隣・学校・会社といった日常生活上の所属集団への孤立状況を特定化し、最後に非日常的集団

への参加の度合と日常生活上の所属集団への参加の度合との相関関係について分析を行った。その結果、3つのタイプが析出された。

1. 非日常生活領域で形成する集団への同調行動を行わない傾向にあり、日常生活領域で係わる集団によく参加する傾向にある者。
2. 非日常生活領域で形成する集団への同調行動を行う傾向にあり、日常生活領域で係わる集団に参加しない傾向にある者。
3. 非日常生活領域で形成する集団への同調行動を行う傾向にあり、日常生活領域で係わる集団によく参加する傾向にある者。(p. 39)

1のタイプは学校や会社などの日常生活領域で係わる集団で孤立していないため、ライブ会場やイベント会場などの非日常生活領域で形成する集団への同調行動を行わないといえる。2のタイプは日常生活領域で係わる集団で孤立しているため、非日常生活で形成する集団への同調行動を行う。3のタイプは日常生活領域で係わる集団で孤立しないまま、非日常生活領域で形成する集団への同調行動を行う(吉光, 1997)。

ここで2のタイプに着目したい。なぜなら、2のタイプは学校や会社などの人間関係では得られないものをオッカケ・グループの人間関係で得ており、そのためにオッカケ・グループに依存している可能性が考えられるからである。2のタイプの構成員達が集まったオッカケ・グループでは、日常生活で孤立を経験しているため、自分と興味・関心が同じ仲間を選ぶ。そして、共に行動することや、仲間に対する同調行動として、おっかけが行われる。そのため、同じ体験を共有することや共感し合うことも多く、強い連帯感が生まれているのではないだろうか。

3-3 オッカケ・グループにおける人間関係の変化

共通の興味・関心で結ばれ、同じ体験を共有し、共感し合うオッカケ・グループは一見、構成員にとって自分の居場所であり、同志の集まりのように思われる。だが、実際はそうではない。ジャニーズ同窓会(1996)によると、オッカケ・グループには厳しい序列や規則が存在するという。昔からファンをやっていてタレントや事務所側にも親しいおっかけは、常連にかけて「上連」と呼び、続いて「中連」「下連」といった序列付けがある。上の者への服従や敬意が必要で、悪いことをすると会員証をとりあげられるなど厳しい規則と序列があるという(ジャニーズ同窓会, 1996)。

また、土井(2004)は「内発的な衝動の共有による親密な関係には実質的に他者が不在で、異質な要素が含まれていないとすれば、その結合の様式は強固なように思えます。しかし、実際には逆であって、それは不安定でもろい結合の様式なのです。彼らの感覚的な一体感とは、じつはお互いの思い込みの上になしか成立しえないものだからです。」という(p. 54)。この「内発的な衝動」とは、自分の感情や行動が妥当なものであるか否かを社会

的な基準に照らし合わせて決めるのではなく、社会学者のベラー（1991）の言葉を借りるならば、「良い感じ—feeling good」（p. 92）といった自分の生理的な感覚に照らし合わせて決めることである。そしてこの自分の生理的な感覚、即ち自分が持つ「良い」や「好き」といった感覚的な一体感を共有していたとしても、現実には生まれも育ちも違う他人同士が出合っているため、ものの見方や感じ方が微妙に異なる。また自己の内面から湧き上がってくる衝動や感覚は、自分の意思でコントロールできるものではない。そのうえ、この衝動や感覚は安定した基準とはなりえず、その場の雰囲気や気分で遷り変わっていくものであると土井（2004）はいう。

このようにオッカケ・グループには複雑な人間関係や駆け引き、嫉妬や憎悪などが存在しており、非常に脆い関係であると言える。なぜなら、オッカケ・グループを構成する人々は本当の意味での仲間ではなく、おっかけ対象への好意という一点だけで繋がっているからだ。おっかけ対象への好意以外では共通するものがほとんどなく、結節点が少ない関係性なのである。

4 オッカケ・グループを支えるカーストと承認

4-1 オッカケ・グループ内に存在する「カースト」

脆い関係性で繋がれたオッカケ・グループを支えるものとして「カースト」が存在する。白河（2013）によると、「カースト」とは「一つの集団において、そこに属するメンバーそれぞれが、その集団にしか通じない基準でお互いを暗黙のうちに格付けしあい、その序列の認識と共有が行われる。」（p. 28）ものである。そして、「その集団における強者・弱者が『その場の空気』でメンバー全員に共有され、その結果、各人の行動まで限定」される（p. 28）という。

オッカケ・グループでは、おっかけ対象との関係を基準にして格付けが行われる。つまり、おっかけ対象から「認知」を得た人やおっかけ対象との関係が親しい人がカースト上位者になることができるのである。先に挙げた上連、中連、下連という序列はその人達が「何回ライブコンサートに行ったか」「どのくらいの期間おっかけをやっているか」といった活動の経験がもとになっている。一方、ここで言うカーストはおっかけ対象との関係をもとにしたものである。そして、このカーストの基準は非常に不安定なものであるといえる。なぜなら、カーストの上位者になるため、おっかけ対象と親しい関係になるための明確な方法や基準はないからである。おっかけ対象は人であり、そこに成立するのは人間関係である。自分がどれだけおっかけに時間や労力を注いだとしても、その努力を評価するのはおっかけ対象であり、報われる—即ちおっかけ対象に認知してもらえる—とは限らない。白河（2013）は、カーストが生まれる原因について「個人の実力が評価に直結し

ない、成果主義ではない集団、ある意味ぬるい集団でも、カーストは生まれやすい」(p. 37)と述べている。これは裏を返せば、誰がいつどんな時に、そのカーストの上位者になるかわからない、いつとんでん返しが起こるかわからない状況だといえるだろう。つまり、カースト自体も不安定なのである。

また、このオッカケ・グループはカースト上位者の周りに形成されやすいと考えられる。なぜなら、カースト上位者と行動を共にすることで、自分に対するおっかけ対象からの見られ方や得られる情報が変化するからだ。つまり、オッカケ・グループの他のメンバーというのは本当の仲間ではなく、自分にとってメリットがあると考えられる利用し合う相手なのである。もちろん、日常生活で孤立しているから、オッカケ・グループの構成員が好きだから、といった所属の理由もあるだろう。しかし、このおっかけ対象からの見られ方や得られる情報の変化こそが、オッカケ・グループに所属することで得られる最も大きなメリットであり、カーストが存在する苦しい集団であっても所属し続けたいと願う理由であるといえるだろう。

4-2 オッカケ・グループにおける承認の役割

では、どうすればオッカケ・グループに所属し続けることができるのだろうか。先にも述べた通り、オッカケ・グループはあるおっかけ対象への好意という感覚的かつ感情的なものだけで繋がった集団である。その好意以外の年齢や職業、育ってきた環境などは異なる場合が多い(吉光, 1996)。つまり、この好意こそが互いを結びつける唯一の共通点なのである。もし、そこで「おっかけ対象と食事をした」など自分だけがおっかけ対象に接近し、何か特別な想いをしたような場合、それは所属するオッカケ・グループの他のメンバーに対する裏切りとなる。この裏切りが生じた瞬間、オッカケ・グループの構成員ではいられなくなる。

このような環境の中で、オッカケ・グループへの所属を繋ぎ止めるために有効なものが、オッカケ・グループの他のメンバーからの承認である。承認を得るということは、他のメンバーから必要とされる存在になるということであり、グループ内で自分の安定した居場所を得ることに繋がると考えられる。しかし、ここで重要なのが、グループ内でも誰から承認を与えてもらうかということである。土井(2014)は、承認は自分と対等な相手からではなく、圧倒的な存在として君臨する相手から得るものでなければ、絶対的なものとはいえないという。誰かから承認を与えられたとしても、それが対等な相手からのものである限り、究極の充足感を得ることはできないというのだ。オッカケ・グループにはカーストが存在すると前節で指摘した。この場合、カースト下位者は下位者同士で承認を与え合っても満足することはできない。しかし、カースト上位者は下位者にとって、圧倒的な存在として君臨する相手であり、絶対的な承認を与えてくれる存在であるのだ。

では、どうすればカースト上位者から承認を得ることができるのだろうか。承認を得るためには、カースト上位者に対して何か価値のあるものを提供しなければならない。そしてこのオッカケ・グループでの価値とは、全ての構成員が共通して好意を抱くおっかけ対象に関するものである。そこで、例えば自分が見た自分しか知らないおっかけ対象の情報や、カースト上位者が欲している他のオッカケ・グループの情報は、極めて有効な提供物となる。しかしこの場合、誰もが得られる情報では価値として成り立たない。その人でなければ得られない、その人だからこそ得られる付加価値のついた情報を提供しなければ、価値のあるものとして認められないのである。そして、このカースト上位者のニーズを満たすことや、カースト上位者にとって有益なものを与えることができた時、初めて承認を得ることができるのである。その際に、カースト下位者は上位者からその人しか得られない付加価値のついた情報を得ることができることもあるだろう。このカースト上位者からの承認こそが、オッカケ・グループからの承認となるのである。

では、カースト上位者のニーズを満たすためにはどうすればよいのだろうか。そのためには、共におっかけをするしかないと考えられる。共におっかけをし、カースト上位者のニーズを探ったり、他のファンとおっかけ対象にアンテナを張ったりして、情報を集める努力をしなければならないだろう。また、自分にしか得られない情報を得るために、おっかけ対象との関係をより親しいものにする努力も必要である。つまり、おっかけ対象からの認知を得ることで、自分とおっかけ対象だけのオリジナルな関係を築くことができ、それによって得られる付加価値のついた情報こそが、オッカケ・グループの中で自分の存在の支えとなるのである。

一見、自分だけが得られる付加価値のついた情報をカースト上位者やオッカケ・グループのメンバーに提供することは、他のメンバーとの関係を不安定にすることに繋がるように思われる。しかし、カースト上位者が持つ情報を上回るような情報を下位者がもった場合、カーストは容易に入れ替わる。オッカケ・グループの中で認めざるを得ない追っかける対象との関係性という評価基準に照らして、提供される情報の価値次第では、カーストが入れ替わることも起こり得るのである。

5 まとめ

本稿では、芸能ファンの応援行動の一つであるおっかけに着目し、その動機となる「オッカケ・グループの仲間から承認を得るためにおっかけを行う」ことについて考察してきた。この動機の背景には、オッカケ・グループの構成員一人一人が日常生活で築いている人間関係があると考えられる。もちろん中には、学校や会社などの日常生活での人間関係が充実している構成員もいる。しかし、吉光（1997）が明らかにしたように、孤立してい

る構成員もおり、彼らにとってオッカケ・グループは自分の居場所である。では、なぜ同じ人間関係でも、日常生活とオッカケ・グループで関係に対する感じ方が異なるのだろうか。それは、日常生活で所属している人間関係と比べ、オッカケ・グループ内での自分に対する評価基準が明確であるからだ。土井（2014）は、現代の日常生活における人間関係では、価値観の多様化により、既存の制度や組織に縛られることなく、付き合う相手を勝手に選べる自由を得たという。しかし、この自由は自分だけでなく相手も持っており、自由度の高まりは自分が相手から選んでもらえないかもしれないというリスクの高まりでもあるという。つまり、自分に対する全ての評価は相手に依存しており、「選んでもらえるか」「誰に選んでもらえるか」ということも全て相手に委ねているのである。自分がどれだけ努力しても、相手の感情や考え方、価値観次第では、承認を得どころか全て無駄になる可能性がある。一方、オッカケ・グループ内ではカーストの存在により、自分の存在を保証する確固たる承認を与えてくれる相手が明確である。即ち、カースト上位者との関係を良好にし、カースト上位者のニーズを満たすことができれば、承認を得ることができるのである。そして、そのためには共におっかけをしながら、自分とおっかけ対象との関係をより親しいものにし、得られた情報をカースト上位者に伝えたり、カースト上位者のニーズを察知したりしながら、自分の価値を提供し続ける必要があるのである。

このように、おっかけという行動は一見、おっかけ対象への好意のみで成り立っているように思われる。しかしその背景には、おっかけ対象への好意だけでなく、複雑な人間関係や個々人が抱える自己肯定感・自己顕示欲が存在する。おっかけ達は「生きやすさ」を求めて、おっかけをしているのである。

引用文献

- [1] 小城英子（2004）「ファン心理の構造（1） ファン心理とファン行動の分類」『人間科学』61：191-205.
- [2] 白河桃子（2013）『格付けしあう女たち「女子カースト」の実態』ポプラ社.
- [3] ジャニーズ同窓会著 平本淳也監修（1996）『ジャニーズおっかけマップ』鹿砦社.
- [4] 土井隆義（2004）『「個性」を煽られる子どもたち—親密圏の変容を考える』岩波書店.
- [5] 土井隆義（2014）『つながりを煽られる子どもたち—ネット依存といじめ問題を考える』岩波書店.
- [6] 濱野智史（2012）『前田敦子はキリストを超えた—〈宗教〉としてのAKB48』筑摩書房.
- [7] 水野悠子（1998）『知られざる芸能史 娘義太夫—スキャンダルと文化のあいだ』中央公論社.
- [8] 向居暁・竹谷真詞・川原明美・川口あかね（2016）「ファン態度とファン行動の関連性」『研究紀要』64・65：233-257.
- [9] 吉光正絵（1996）「ライブ会場を巡る出会い—都市に生きる若者の人間関係のはじまり—」『社会学論集』3：237-248.
- [10] 吉光正絵（1997）「オッカケ・グループの形成—日常生活領域で係わる集団における孤立と非日常的生活領域で形成する集団への同調行動—」『家政学研究』44,1：33-40.
- [11] 吉光正絵（2013）「ポピュラー音楽と女性ファン」『国際情報学部紀要』14：265-276.

- [12] 吉光正絵 (2015) 「ポピュラー音楽と日本の女性ファン」『長崎県立大学国際情報学部紀要』 15 : 213-223.
- [13] マートン, R. K. 著 森東吾, 森好夫, 金沢実, 中島竜太郎共訳 (1961) 『社会理論と社会構造』 みすず書房.
- [14] ベラー, R. N. 著 島蘭進, 中村圭志共訳 (1991) 『心の習慣—アメリカ個人主義のゆくえ』 みすず書房.